

## 開会の辞

財団理事 江橋 節郎（岡崎国立共同研究機構）

○江橋 岡崎国立共同研究機構の江橋でございます。

私は財団の設立以来、理事の末席を汚しておりますが、最近の事業は私より次の世代の理事が立派に進められて、本来は私の出る幕ではございません。しかし、今日は科学研究の精神を問うという大命題を掲げた財団の講演会でございます。

研究会の趣旨は、冒頭に掲げました通りで、次世紀の人類は資源とエネルギーの枯渇に直面します。そうした危機に対処する責任はもっぱら先進国にあるといわれても当然のことです。そこで先進国の戦略が必要です。それは新たな開発競争なのか、表題の科学の無限の可能性を信じて、未知の大航海に船出することかも知れません。先進国には船出する体力があります。科学世界の新たな航海は、人類に新しい活路をもたらすでしょう。

しかし、私も日本の国の科学行政の姿勢を、著しく憂える者の一人です。

そうした時期を念頭に企画された今回の講演会では、基調講演と申しますか、問題提起と申しますか、今日の講演会のために伊藤正男先生、吉川弘之先生のお二人から貴重なお話をいただくことになりました。お二人は私とも研究仲間でもあり、また司会の渥美和彦先生、古川俊之先生とも昔の仲間ということで、私が開会の挨拶を仰せつかった次第のようですので、財団の理事の立場を離れた印象を述べたいと思います。

先程控室でお話していたのですが、そもそも開会の挨拶というのは時間の調整のためにあります。少し皆様の集まりが遅いというので5分遅らせて、開会の挨拶を申し上げていますが、挨拶は5分で済ませる予定なのでまだ2、3分残ります。そこで少々お話ししようと考えたのですが、戦後の日本は何をなし遂げたかについて、私見を簡単に申します。日本は文化国家という目標を掲げて、営々として経済発展を続けて参りました。その結果がご覧の通りの有様でして、経済を最優先にして前進しましたが、何とバブルがはじけて元の木阿弥のように本性が現われた。せっせと稼ぎはしたが、その間大学という大学が挙って本当に惨めな状況になってしまった。これは皆さんよくご存じの処であります。

それでは文化が育ったのかと考えますと、これも怪しいものであります。文化の概念が大学軽視と同じ意味だったと思うんですね。私はある芸術畑の方で文化勲章の受賞者が、理工系の研究者を名指して「何であんな人に文化勲章が行くんでしょうか」といわれたのをこの耳ではっきりと聞きました。これが日本人の考えている文化の質でありまして、伊藤先生にしましてもわれわれも含めて、生涯を賭けた研究などは決して文化とは見てくれないのです。要するに昔の慣習でいうと、末は大工か藪医者かという感覚でコツコツやっているのを評価する、そういう認識しかなかったと思うのです。

そういう大時代的な物の考え方でいては、もうどうにも前途がないという危惧感が、今日の講演会の企画の真髓であり、未来を予言する精神であると思います。つまり、日本の近代史の歩みの中で、戦前は軍備を拡張充実することが国力であった。戦後はそれが経済力に置き換わっただけではなかったのかと思うのです。

しかし、これからの未来は、これは私の個人の意見ですが、文化とは科学そのものであって、科学研究を充実しその水準を上げること自体が、国力を築くという考えになるに違いありません。科学研究の成果を何に利用するかということも大事ですが、利用は文明としての科学の1つの

形態に過ぎない。科学研究の発展のいかんこそが未来の国家的課題であって、それゆえに全く新しい時代に則した全く新しい発想で取り組まなければならない。何らかの世俗的な目標があって、それに科学研究の進路を合わせるのではなく、科学そのものを発展させなければならないという時代が来ると信じます。そういう意味で、未来は閉塞どころか激動の時代だという考えに賛同します。これは「新たな大航海時代」という本日の主題の意味についての私の解釈であります。

今日のお二人のお話はいずれも研究者にとって極めて魅力的な問題提起であり、そればかりか普通ではない長時間をディスカッションに充てる予定であります。ここにお集まりの方々は各分野、各方面の重責を担っておられ、当然本日の問題提起に対して特に強い関心がおありで、またそれについて独自の展望を持っておられると存じます。そういうメンバーがここに集まって、ディスカッションをする中で皆さんのご意見を十二分に開陳し、討論を展開していただいて、将来の科学研究への展望を覗き見たいと思います。

これをもって、開会のご挨拶とさせていただきます。